

# RT01

## 小学生を対象とした「食の意識を育てる授業」プログラムの開発

〇岩井 梢<sup>1)</sup>、守山正樹<sup>2)</sup>

1) NPO 法人ウェルビーイング、2) 福岡大学医学部公衆衛生学教室

### 【目的】

現在、食に関する情報が氾濫している一方で、子どもたちの食の意識を育てる機会は限られている。そこで、今回、小学生を対象とした「食についての意識を育てる授業」のプログラムを開発した。

従来の授業では一斉に同じ方法で学ぶ形式が多く用いられるが、同じテーマを学ぶにも様々な方法がある。そのため、授業の実施の効果を検証するために、無作為化比較試験の方法を導入した。本研究の目的は、今回開発した食の意識を育てる授業のプログラムの検討である。

### 【方法】

対象：S市H小学校6年生40名  
 授業は11月22日の5限目と6限目の時間で実施した。従来の授業では一斉に同じ方法で学ぶ形式が多く用いられるが、同じテーマを学ぶにも様々な方法がある。そのため、今回、児童らを恣意的ではなく、無作為に2つのグループに分け、各グループで異なった学習方法で学んでもらった。ランダムに分かれてもらう方法としては、袋の中に児童数のビー玉（2色を同数ずつ）を入れ、児童に引いてもらうというシンプルな方法を用いた。

<流れ>

- ① 事前アンケートの記入
- ② グループ分け

### ③ 2つの形式で授業を実施

- ・ 2次元イメージ展開法（図1）<sup>1), 2)</sup>
- ・ 知識提供

### ④ 事後アンケートの記入

### ⑤ 交流

### 3) 評価

評価は、事前と事後にアンケートを配布し、評価を行った。

統計処理は、分布の差については $\chi^2$ 検定で検討した。

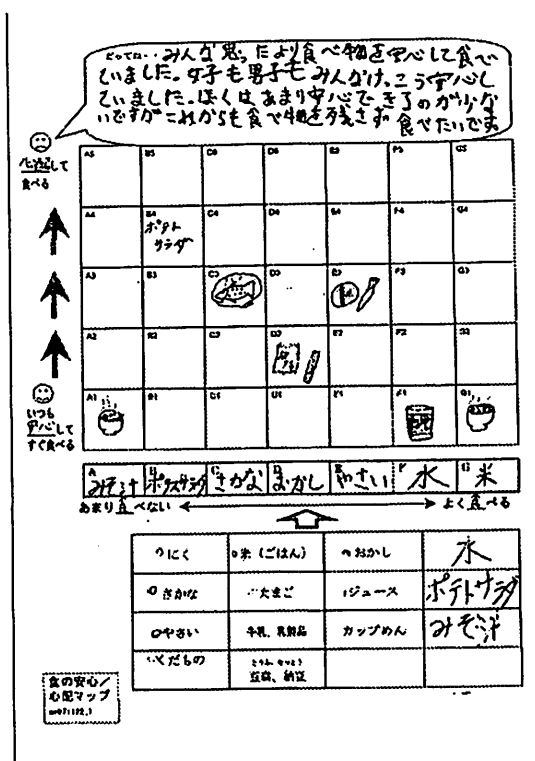


図1 2次元イメージ展開法の記入例

### 【結果】

授業実施前には、グループに分けられ

ることに対する児童がどのような反応を示すか、不安があった。そのため、事後評価で、「グループに分かれた時の気持ちは？」という質問を加えた。その結果、最初に授業を実施した M 小学校では「期待した」(36.6%)「特に何も感じなかった」(34.1%)と、特に抵抗感を抱いてはいなかった。

授業に対する評価では、グループ間の差が見られた項目は「授業の楽しさ食についての学習意欲が高まっていた ( $p=0.0002$ )」、「食に関する勉強の今後の意欲 ( $p=0.0442$ )」の2項目であった。授業の楽しさ、今後の意欲、いずれの項目も2次元イメージ法グループの方が良い値を示していた。

自由記述で、「私が学んだことは」という項目について、学習グループは「食品に様々な表示されていること」(13名)「賞味期限と消費期限の違い」(7名)を学んだと記述した者が大半であり、知識提供を行った内容についての学びの記述が多く見られた。一方、2次元イメージ展開法グループは、「食の安心・心配の仕方は人によって違いがあること」(5名)、「食事の食べ方」(4名)など、この他少数の様々な学びが見られ、学びの種類が豊富であった。

### 【考察】

今回の結果より、児童を対象としたプログラムの検証を行う際、無作為に2つのグループに分けて、別々の方法で授業

を行い、検証することは可能であると考えられた。

また授業の進め方に関しては、知識を提供する従来型の授業は提供した知識はきちんと学ぶことができていた。しかし、自分の食生活をふりかえるマップを作成し、友達と交流する授業である2次元イメージ法を用いた授業の方が楽しく、今度の食への学習意欲が高まるということが明らかとなった。知識提供を行わなくても、児童らは自分の食生活をふりかえり、他者の食生活や考えを聞くことで様々な気づきが起こったと考えられた。

### 【論点】

1. 当日は、2次元イメージ展開法を実際に体験してもらい、子どもたちへの働きかけ方について検討していきたいと考えています。
2. 本プログラムの普及方法についてのご意見をお聞かせください。

参考文献：

- 1) 守山正樹：対話的・参加的に対象者の現状を知る試み(1) 主要な食のイメージから、その人らしさを組み立てる, 臨床栄養 2006 ; 108(2), 127.
- 2) 守山正樹：対話的・参加的に対象者の現状を知る試み(2) その人らしい食のイメージに、さらに一歩近づく, 臨床栄養 2006 ; 108(4), 383.

連絡先：岩井 梢

E-mail : iwai@well-being.or.jp